

## 『明るい夜に出かけて』

佐藤多佳子 著 新潮文庫 781円(税込)

### ハガキ職人の物語

会員 田代 悠介 (71期)



寝られない夜、深夜ラジオに救われた。

この小説は、そんな経験がある人の心に刺さること間違いなしの作品である。

主人公の富山（とみやま）は都内の大学に通う大学生。「ある事件」がもとで心を閉ざし、大学を休学し、神奈川県金沢八景で一人暮らしを始める。先が見えない悶々とした生活を送っている富山の唯一の生き甲斐は深夜ラジオを聴くこと。富山は単なる深夜ラジオのラジオリスナーではなく、コーナーにネタを投稿するいわゆるハガキ職人である。元々富山は様々な番組にネタを投稿する有名なハガキ職人であったが、「ある事件」がきっかけとなりネタの投稿をやめてしまう。その後、「アルコ&ピースのオールナイトニッポン」（実在した番組）のとある回を聴き、いてもたってもいられなくなり、富山は以前とは異なるラジオネームでのネタ投稿を再開する。

そんな中、バイト先のコンビニで、たまたま「アルコ&ピースのオールナイトニッポン」の有名ハガキ職人佐古田に出会う。その佐古田、バイトの同僚の鹿沢、旧友の永川との交流を通じて、色を失った世界が蘇っていくといったあらすじである。

実は私自身、深夜ラジオに救われた人間の一人である。もっと言ってしまうと、この「アルコ&ピースのオールナイトニッポン」に救われた一人である。

「アルコ&ピースのオールナイトニッポン」は、「アルコ&ピース」というお笑いコンビがパーソナリティを務め、2013年4月から2016年3月までの3年間、放送された深夜ラジオ番組である。

この3年間はまさに私が司法試験受験生として苦しんでいた時期と重なる。

学生時代の同期達が社会に出る中、自分は受験生として砂をかむような毎日を過ごしている。自分が司法試験に本当に合格できるのかといった漠然とした不安を抱き、夜寝られないことが度々あった。そんな時に私を支えてくれたのが、「アルコ&ピースのオールナイトニッポン」であった。

彼らのくだらないラジオを聴くと不思議とリラックスでき、自然と眠りにつくことができた。まあ、彼らにリスナーに寄り添おうという気などなく、ただただくだらないラジオをやっていただけなのだろう。

そんな富山と佐古田（と私）を支えた「アルコ&ピースのオールナイトニッポン」が2015年3月に番組終了の危機を迎える。

というのは、毎年3月末は最大の改編期であるため、多くのラジオ番組が始まり、そして終わる。改編期が近づく1月頃から、ラジオリスナーは自分の好きな番組が終了しないか、そわそわする。

「アルコ&ピースのオールナイトニッポン」も例外ではなく、番組自体の気持ちは高く聴取率（テレビでいう視聴率）も悪くはないものの、一般的な知名度という点では他の曜日のパーソナリティに劣る。そのため、3月末に番組が終わってもおかしくなかった。

富山は、自身の心の拠り所である「アルコ&ピースのオールナイトニッポン」改編騒動を通して、自分の人生を見つめなおし、一つの夢を見つけることになる。

富山がネタを投稿することをやめた「ある事件」とは何か、富山が改編騒動を通してどのような夢を抱いたのか、是非とも本書を読んで確認していただければ幸いである。

BITTERSWEET SAMBAを聴きながら。